

1.1 人間科学と平和教育

～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の取り組みから



村本邦子

(立命館大学大学院応用人間科学研究科教授、臨床心理学)

1. はじめに

最初に、本日のテーマである「体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム」の開発を行ってきた私たちの取り組みの概要を紹介させていただきます。私たちと言うのは、本シンポジウムの司会者である村川治彦先生、報告者である張連紅先生とアルマンド・ボルカス先生の他、ちらしに名前を挙げさせて頂いている笠井綾さん、金丸裕一先生、小田博志先生、吉沅洪先生、陶琳瑾先生、その他、一緒にワークしながら通訳はじめさまざまな形でお手伝い頂いてきたみなさんのことです。

わずか20分の持ち時間でいったい何が伝えられるだろうと思いつつも、お名前を挙げさせて頂いたのは、このプロジェクトが、さまざまな背景を持つたくさんの人々が合流してきたところに存在しているということを知って頂きたかったからです。小田さんは、「平和は、小さな湧水が流れ出し、結びつきながらいつしか大河となって、最初想像もつかなかった海へと流れ込むところに実現するのではないか」と言っています。この報告は、その小さな湧水のひとつである私の視点からのものになります。

2. 私の背景とHWHとの出会い

私は臨床心理士として、20数年に渡り、女性や子どもの虐待、DV、性暴力など個のトラウマ治療に関わってきました。そのなかで二つの気づきを得ました。ひとつは、予防の重要性を実感し、具体的な予防教育に取り組みながら、武

力優位の社会のなかで、子どもたちに予防教育を行う矛盾を感じるようになったことです。個のトラウマは閉じられたものではなく、空間的拡がりを持つ、つまり、社会あるいは世界と切り離せないという視点です。二つ目は、具体的な臨床の事例において、暴力の根っこを辿ると戦争という集団の暴力に行きつくということです。時間的拡がり、歴史という視点です。そんな問題意識のなかで、今日、紹介する HWH (Healing the Wounds of History 歴史の傷を癒す) と出会いました。

この後、報告されるボルカス先生は、「集団トラウマの影響は、イメージやストーリー、感覚的記憶、両親や教師、メディアから送られる有言無言のメッセージとして内在し、集団が共有する物語として発展する。この物語は無意識に吸収され、意識されないところで、個人やグループの文化、国家のアイデンティティに影響を与える」と言い、今回紹介する HWH を開発、実践してられました。彼は、アウシュビッツのサバイバー II 世であり、ドラマセラピーや表現アートセラピーの手法を使った方法でユダヤ人とドイツ人、パレスチナ人とイスラエル人など対立する集団のワークを行ってきました。この HWH の前提となる考え方、目指すもの、6つのステップは以下のようなものです。

- ①タブーや沈黙を破る
- ②お互いを集団としてではなく、一人一人が独自の物語と顔を持つ人間として見る
- ③自分の中の加害者になる可能性に気づく
- ④深い悲哀の体験
- ⑤パフォーマンス、儀式、追悼などの統合・表現と共同作業
- ⑥社会的奉仕や創造的活動への変換

詳細については、ボルカス先生ご自身からご紹介があるでしょう。

3. HWH を取り入れた試み

日本と他のアジアの国々の葛藤にこの HWH を取り入れることを考えた村川先生が 2007 年 5 月、立命館大学でこの企画を行い、私は HWH を知りました。プレイバックシアターという手法を使った公開公演でしたが、イベントの幕開け、フロアから一人の日本人男性が、「日本は被害者だ！原爆を落としたアメ

リカから何しに来た？帰れ！」と大声で叫び、私たちは一瞬凍りつきました。この時、ボルカス先生とプレイバックたちがこの声を舞台上でプレイバックしたことで、男性の怒りの表出の背後に隠れた哀しみや無念がしみじみと表現され、会場は静かな共感に包まれました。知的な正義論を戦わせ感情をエスカレートさせていくのではなく、どんな感情も大切に扱われ共感されるならば、次のステージに進むことができるのだと、サイコセラピストとしては当たり前のことを改めて確信することになりました。

ちょうどその年は、南京虐殺 70 周年で、11 月に南京で開催された国際会議「南京を想い起こす」にそのまま出席しました。そこで、張連紅先生や南京の学生さんたちとの出会いがありました。自分の国がしてきたことを現地で直視するのは辛く苦しい体験でしたが、南京のみなさんに大変暖かく迎え入れてもらい、「日本の若者たちと出会いたい。もっと話したい。先生、今度は是非立命館の学生たちを連れてきて！」と熱いエールをもらいました。これは大変ありがたく、何としてでも応えなければと思いました。ただし、この時、あまりに残忍な日本軍の蛮行に衝撃を受けた日本人一行は、二次受傷と言いますが、全員、身体症状を出していました。安全に過去と向き合うために、アルマンドの力を借りることにしました。そして、2009 年 10 月、アルマンドを招く形で、南京師範大学で 4 日間の HWH を、2011 年 10 月に、同じく 4 日間の HWH 続編を実施しました。これまでの取り組みは下記のようなものです。

- 2007 年 5 月 「戦後世代が受け継ぐアジアの戦争」ワークショップとプレイバックシアター（立命館大学）HWH
- 2007 年 11 月 国際会議「南京を想い起こす」（南京師範大学）
- 2008 年 7 月 ①ノンフィクション・ステージ「地獄の DECEMBER ～哀しみの南京」
②「こころとからだで考える歴史のトラウマ～アジアの戦後世代が継承する戦争体験」ワークショップとプレイバックシアター（立命館大学）HWH
- 2009 年 3 月 “Japanese and Chinese Cultures : Facing the Legacy of World War II”（サンフランシスコ）HWH
- 2009 年 10 月 7 日～ 10 日国際セミナー「南京を思い起こす 2009」（南京師範大学）HWH

http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html

- 2010年10月1・2日トントアルファ国際会議ワークショップ
- 2011年8月6・9日第3回国際表現性心理学会（蘇州大学）HWH
- 2011年10月5～8日国際セミナー「南京を思い起こす2011」（南京師範大学）HWH

<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>

HWHは一見、集団心理療法の形をとっていますが、その内容をクローズドの小さなグループ内部に留めるのではなく、ステップ⑤「パフォーマンス、儀式、追悼などの統合・表現と共同作業」に見られるように、参加者がグループで体験したものをパブリック・イベントとしてコミュニティに向けて表現し問いかけるというコミュニティワークを含んでいます。2009年には、最終日の追悼式という形で公開しましたが、2011年には、これに加え、プレイバックシアターという手法を用いた公開イベントを行いました。日本と中国のプレイバックたちを招き、フロアから提示された物語を共演してもらうというものでした。なお、2011年度の参加者は40人、プログラム内容は下記のようなものです。

10月5日	午前：研究報告とオリエンテーション 午後：HWH（名前と動き、想像のリレー、音の出るボール、ここからあそこへ、30秒シアター、せりふの繰り返し、ソシオ・サークル、記憶のオブジェなど）
10月6日	午前：幸存者証言 午後：HWH（アイデンティティのワーク、椅子のワーク①など）
10月7日	午前：シェアリングとプレイバック 午後：HWH（インタラクティブな彫刻、贈り物、シーンを演じる、おとぎ話、おとぎ話を演じる、アレゴリー、メッセージの地図、サイコドラマなど） 夜：〈公開〉プレイバックシアター
10月8日	午前：燕子磯での追悼式 午後：HWH（謝罪のワーク、椅子のワーク②、希望の木）

2011年10月国際セミナー「南京を思い起こす2011」のプログラム内容

主催者たちが簡単なイントロダクションを行い、2007年、2009年の参加者たちの発言があり、参加者の自己紹介を経て、張先生の「南京を思い起こす：負の遺産を共有財産へ」の講演とミニ・プレイバックシアター、そして、ウォームアップ・エクササイズや記憶のオブジェなどのワークを行いました。二日目の午前、生存者夏淑琴さんの証言を聞きました。夏さんの裁判のことは知っていますから、ますます辛くて身が縮むばかりでしたが、おばあさんの暖かさ、優しさ、寛大さ、そして強さに私たちは大きな力をもらいました。2007年度常志強さんの時もそうでしたが、生存者に語ってもらえることのありがたさはいき尽くせません。でも、チャンスはもう残り少ないのです。おばあさんたちが生きているうちに私たちにできることを考えると気持ちは焦ります。

それから、アイデンティティのワーク、椅子のワーク、メッセージの地図、サイコドラマ。三日目の夜は公開でプレイバックシアターを行いました。プレイバックでは、国境を超えた恋人、両方の国の立場がわかる留学生、日本人は悪いと思いついてきたがふと気づくと、ソニー、東芝、日立など日本製品を愛用している自分など、引き裂かれながらも手をつなごうとする若者たちの物語が共有されました。最終日は、燕子磯での慰霊を行い、謝罪のワークや希望の木で閉じられました。

4. いくつかの問い

二度のワークショップの後、参加者はそれぞれリフレクションを行い、報告書の形でそれを提示しています。ここで細部に入る余裕はありませんが、ポイントとなるテーマがいくつかピックアップされ、問いが投げかけられています。今回、このシンポジウムでは、私たちの取り組みはいったい何だと意味づけられるのか、何を課題として、今後どんな方向性で進んでいくべきなのかを見出すことができればと期待しています。ドラマや表現アートを使って、被害者と加害者の子孫が共に歴史のトラウマと向き合うという、あまり多くの人々が足を踏み入れたことのない領域に入り込み、自分たち自身で実験的に試行錯誤しながら、いまだプロセスの途上にあります。

今回のワークショップでテーマにあがったひとつに「無力感」がありました。日本人側は繰り返し「無力感」を表明し、中国人側はこれに大変苛立ちました。

ボルカス先生の仲介があって、「日本国内で右翼の声ばかりが目立つようだけれど、日本国内でも昔から一生懸命やっている人たちがいる。どこかで折り合いをつけて、僕たちを応援してくれ。お願いします」の言葉が投げられ、「中国側もみんな自分のことを変えようと思っている方もいる。信じてください。あきらめないでください」とのエールが返され、「今、双方に必要なものは何か」というボルカス先生の方向づけにより、「一緒に、同じところへ歩いていきたい」という中国人側の言葉から、握手や熱い抱擁が交わされ、参加者たちは絆の感覚に浸って幕を閉じました。

今年は、このような形でさらに学際的な検討を行うとともに、ボルカス先生の力を得て、日中韓などアジアのHWHのファシリテーターを育成し、国境や加害被害関係を越えたコ・ファシリテートによるワークショップを目指そうと考えています。私たちが共に歩んでいく先、湧水が出会い、川となり、大河となり向かっていく先は平和であることは間違いありませんが、無力感を超え、HWHの最後のステップである「社会的奉仕や創造的活動への変換」を具体的な形にしていくこと、もっとたくさんの湧水と出会うことができたらと願います。本日のシンポジウムがそんな機会になれば嬉しいです。

村本邦子（立命館大学大学院応用人間科学研究科教授 臨床心理学）

二十年に渡る開業臨床に基づき、虐待、DV、性暴力など個人レベルのトラウマから、コミュニティのトラウマ、歴史のトラウマまで、回復支援、予防、研究に取り組む。